

静岡市埋蔵文化財調査報告

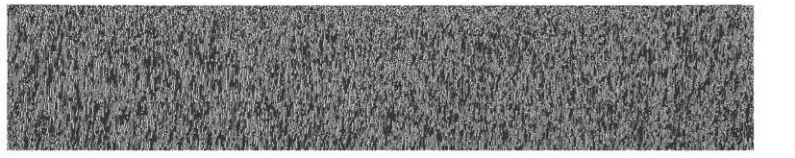
小鹿山神古墳

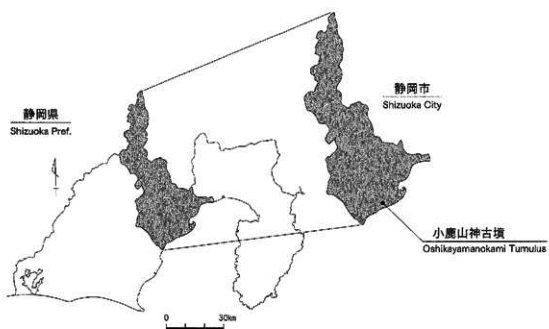
発掘調査報告書

Oshikayamanokami Tumulus

2011

静岡市教育委員会





例 言

1. 本書は、静岡県静岡市駿河区小鹿字山神 1142 - 4 他における小鹿山神古墳（小鹿 6 号墳）の発掘調査（平成 22 年 9 月 30 日付 22 静生文文財第 1559 号）にかかわる報告書である。
2. 発掘調査は、道路及び宅地造成工事に先立ち実施した。調査面積は 220 m²である。
3. 発掘調査は静岡市教育委員会が主体となり、生活文化局文化スポーツ部文化財課が補助執行して実施した。現地調査は、小泉祐紀（文化財課主任主事）が担当した。
4. 出土資料の整理作業等は小泉祐紀が担当し、以下の体制で行った。
整理作業…芝澄子、相川真智子 実測・製図作業…海野雅美
5. 本書の執筆は第 1 章から第 3 章までを小泉が担当し、第 4 章総括を、静岡大学文学部滝沢誠教授に執筆いただいた。本書の編集および写真撮影は、小泉が担当した。
6. 発掘調査に関わる資料は、静岡市生活文化局文化スポーツ部文化財課が保管している。
7. 昭和ハウジング株式会社代表取締役青山昭氏には、文化財保護に対するご理解とご協力を賜った。
8. 発掘調査および報告にあたり、以下の方々からご教示、ご協力を賜った。
大谷宏治、菊池吉修、柴垣勇夫、鈴木敏則、滝沢誠、福島志野（五十音順、敬称略）

凡 例

1. 本書で用いる水準は海拔、方位は真北（座標北）を示す。
2. 本書で扱う遺構実測図は、図ごとに縮尺を示した。
3. 遺物実測図の縮尺は、1/3 を基本とし、大型で縮尺を変えたものは、図中に縮尺を示した。
4. 本書で用いる石室側壁の呼称は、奥壁から開口部を見て右・左としている。
5. 遺物注記は、2010OSYK III とした。なお、2010 OSYK および 2010OSYK II は、同年 6 月と 7 月にそれぞれ実施した確認調査の遺物注記である。

目 次

例言・凡例・目次

第1章	序論	1
	1 調査の経緯と目的	1
	2 確認調査の成果	2
	3 調査の方法と経過	3
	4 環境	5
第2章	調査成果	7
	1 基本層位	7
	2 遺構	7
	3 遺物	8
第3章	考察	20
	1 墳丘の形状と規模	20
	2 出土遺物と古墳の時期	20
	3 小鹿山神古墳と静岡平野における古墳時代の階層性	22
第4章	総括（静岡大学人文学部教授 滝沢 誠）	25
図版		
抄録		

挿図目次

第1図	小鹿古墳群分布図	2
第2図	調査区・基準杭配置図	4
第3図	静岡平野南部遺跡分布図	6
第4図	小鹿山神古墳全体図	9・10
第5図	調査区全体図	11・12
第6図	調査区1土層図①	13
第7図	調査区1土層図②	14
第8図	調査区1土層図③	15
第9図	主体部西壁	15
第10図	遺物出土状況	16
第11図	調査区2	17
第12図	出土土器①	18
第13図	出土土器②	19
第14図	墳丘復元図	21

挿表目次

第1表	小鹿山神古墳調査歴	1
第2表	静岡平野南部遺跡一覧	7
第3表	古墳基礎データ比較表	23

第1章 序論

1 調査の経緯と目的

静岡平野の南東部に位置する有度山の西麓は、無数の谷により隔てられた段と呼ばれる舌状の丘陵が発達しており、そこに多くの古墳群が存在する。小鹿古墳群もそのひとつであり、静岡大学の所在する大段丘陵と谷を隔てた北側の小鹿丘陵上に位置している。小鹿山神古墳は、その小鹿古墳群の第6号墳に当たる。

小鹿山神古墳は、大正4年に当時の地主の南條房吉氏によって主体部が発掘され、その記録が「静岡縣史第1巻」（静岡県1930）に掲載されている。それによると、羨道長4.5 m、幅1.82 m、玄室長8.2 m、幅2.42 m、高さ3.6 mを測り、非常に大きな横穴式石室だったことがわかる。また、見取り図から、両袖型石室であったことも推測できる。石室内には、石棺が5基認められ、うち2基が刳拔式石棺、3基が組合式石棺であったとのことである。出土遺物は、東京帝室博物館（現東京国立博物館）に収められている。

2009年、静岡大学考古学研究室は、小鹿山神古墳の墳丘測量調査を実施した。それによると、墳丘斜面の崩落が進んでいるものの、残存する墳丘は東西約17.6 m、南北約19.4 m、高さ約3 mであり、方墳の可能性が高いことを指摘している（静岡大学考古学研究室2010）。また同年、古墳の北東で宅地造成が行われ、それに伴う上下水道管が現存する墳丘の周囲を囲むようにして埋設されることとなった。これを受けて静岡市は、現存の墳丘外の部分における周溝などの遺構の状況を確認するため、11月に緊急の確認調査を実施した（静岡市教育委員会2010）。また翌2010年には、墳丘の南側で道路造成及び宅地造成が計画され、道路造成部分が現存する墳丘に限りなく近いため、再度確認調査を実施した。それにより、埋没する墳裾及び周溝が確認された。道路及び宅地造成により、これらの遺構が道路下に埋没または削平されることとなるため、記録保存を目的として本発掘調査を実施することとなった。

第1表 小鹿山神古墳調査歴

年 月	調査原因	調査種類	概 要	文 献
1915年（大正4年）	—	発掘調査	地主南條房吉氏による発掘	1・2
2009年8月3日～8月18日 （測量調査）	—	学術調査 測量調査	墳丘の測量調査を実施 東京国立博物館蔵出土遺物の調査	3
2009年11月26日～11月27日	埋設管建設	確認調査	周溝・ヘトレンチ3箇所設定、調査	4
2010年6月21日～6月24日 2010年7月27日～8月18日	宅地造成、 道路造成	確認調査 ／学術調査	周溝および開口部・ヘトレンチ、 合計6箇所設定、調査	5
2010年10月1日～10月26日	宅地造成、 道路造成	本発掘調査	南側周溝、開口部、墓道の調査	6

1 静岡県1930『静岡縣史』第1巻

2 静岡市1931『静岡市史』第1巻

3 静岡大学考古学研究室2010.3『小鹿山神古墳－静岡市小丸山神古墳測量調査・出土遺物調査報告書』

4 静岡市教育委員会2010『小鹿山神古墳確認調査報告書』【平成21年度静岡市内遺跡群発掘調査報告書】

5 静岡市教育委員会2011『小鹿山神古墳確認調査報告書』【平成22年度静岡市内遺跡群発掘調査報告書】

6 本書



(静岡大学考古学研究室 2010 を改変転載)

第1図 小倉古墳群分布図

2 確認調査の成果

2009年11月、古墳の北東で実施された宅地造成に伴う上下水道管の埋設が計画され、古墳への影響が考えられたため、周溝の位置、古墳の正確な規模を確認するために、調査を実施した。現存する墳丘外に3箇所を設定された(第1～3トレンチ;第2図)。古墳の南側、東側および南東に設定された各トレンチで、古墳の墳裾の可能性がある地山傾斜変換ラインが検出された。トレンチ幅がいずれも1mと狭かったこともあり、墳裾と特定するには至らなかったが、地山を削り出して墳丘を構築していること、同年8月に静岡大学考古学研究室が測量調査から方墳の可能性を指摘(静岡大学考古学研究室2010・上記文献3)しているが、試掘結果からも同様に方墳の可能性が高いことが考えられた(静岡市教育委員会2010・上記文献4)。なお、第1トレンチからは大きいもので直径80cmを超える石のほか、20cm前後の石が多く検出され、石室に関わるものであることが考えられた。

上記の調査では、墳裾の可能性のある地山傾斜変換ラインを検出したが、周溝の規模や位置は不明のままであった。2010年、古墳の南側で宅地造成および道路造成工事が計画されたため、6月、古墳の南側の墳裾ラインを確認するために、墳丘南側の西半へ2箇所、周溝の外縁部を確認するために墳丘東側へ1箇所の計3箇所トレンチを設定した(第4～6トレンチ)。第4・5トレンチでは、限定的な検出範囲ではあるが、昨年と同様に地山傾斜変換ラインが確認できた。また第6トレンチでは、墳丘側からの傾斜面が平坦になる地山傾斜変換ラインと、その外側(東側)で地山が立ち上がる傾斜変換ラインを確認することができた。この状況から、地山傾斜変換ラインは周溝と考えられ、周溝のほぼ正確な位置を捉えることができた。また、第4・5トレンチと2009年の第1トレンチの地山傾斜変換ラインを延長すると、わずかに曲がっているが直線的であり、古墳が方墳であると推定することができる。

これらの調査により、地山削り出しという墳丘の構造や、東側周溝のほぼ正確な位置を把握することができたものの、幅1mの狭いトレンチ調査による断片的な調査データからでは、古墳の正確な規模や形状を特定するまでには至らなかった。そのため、7月26日から、再度確認調査を実施することとなった。古墳南側では、周溝の端を確認するために残存する墳丘から離れた位置へ第7トレンチを設定した。また、石室開口部の現存状況を把握するため、第8トレンチを設定した。そして、一度第2トレンチで南東コーナー付近を調査しているが、再度広範囲でコーナーを検出するために第9トレンチを設

定した。第7トレンチでは、南側周溝の外側立ち上がりを確認することができた。第9トレンチでは、墳裾部分、コーナー部分が水道埋設管により消滅しているものの、周囲の検出状況より、2009年第2トレンチ検出の地山傾斜変換ラインがほぼコーナー部分であることを確認することができた。また、第8トレンチでは、コーナーからの墳裾ラインの延長を確認することができた。第8トレンチでは、周溝が開口部で一段下がり、石室入り口は周溝よりも一段低くなっている状況が確認できた。開口部では、当初想定されていた石室の外甕列石が全く見つからなかった。その一方で、周溝中に浮いた状態で大小の石が散在していた。2009年第1トレンチ中と同様、第8トレンチの東端に径50cm以上の石がいくつか見つかった。また、トレンチ南壁付近には、周溝底から浮いた状態で拳大の礫が大量に検出された。拳大の礫は、おそらく礫床に使用された礫であると考えられる。土層序から、大正時代の発掘による可能性が考えられる。ただし、第8トレンチ東端の石や第1トレンチで確認された大型の石は、それよりも下層の黒ボク土系土層から検出され、比較的古い土層と考えられた。開口部や周溝からは、古墳時代の須恵器のほかには律令期・奈良時代の須恵器も出土しており、周辺古墳の類例から奈良時代までの追跡が考えられ、それ以降に石室の一部が破壊された可能性が考えられる。

これらの成果をふまえ、本発掘調査では、周溝全体の形状を検出することで古墳の全形を確認するとともに、開口部の状況をさらに詳しく調査することを目的とし、出土遺物から古墳の年代や、その後現状に至るまでの経緯を再確認することを目的として実施した。

3 調査の方法と経過

現地調査 調査区は、道路が建設される範囲と、事前の確認調査により周溝が確認された範囲を対象とした。南北幅が約7m、東西長約30mの215.5㎡である。本調査区には、事前に実施した確認調査トレンチの第7～9トレンチも含んでいる。また、現地調査が進んだ段階で、開口部に続く墓道が周溝の外、調査区を超えて延びていることが分かったため、幅1m、長さ4.5mのトレンチ状の調査区を追加して設定、調査を行った。先の調査区を調査区1、追加した調査区を調査区2と呼称する。

発掘調査では、2009年に静岡大学考古学研究室が測量調査を実施した際に使用したグリッドを使用した(第2図)。調査区1は、東西に長いため、中心を通るグリッドラインから西側をW区、東側をE区として分けた。そのほか、E区、W区のそれぞれほぼ中央に土層断面の観察を行うための土層帯(ベルト1、ベルト2)を設けており、W区、E区のほか土層帯の東西でも調査区を分け、出土遺物の取り上げ等の基準とした。

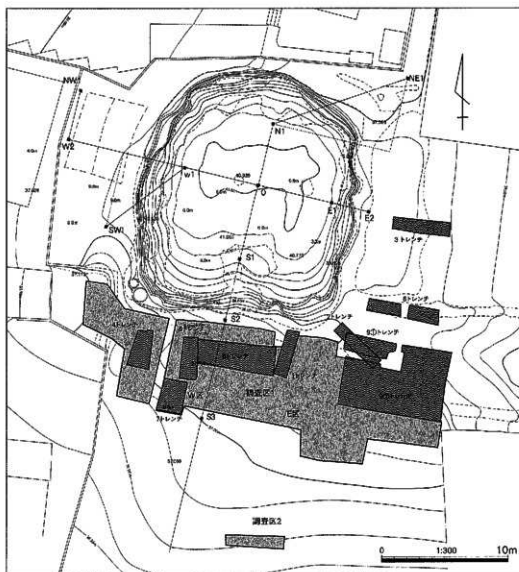
現地調査では、重機で表土を掘削した後、周溝の覆土である黒ボク土から人力にて掘削した。重機で掘削する際に、土層確認のためのベルト1、2が残るように掘削した。その後の人力掘削では、周溝の出土遺物の出土地点を光波距離計(トータルステーション)で計測をして取り上げた。



作業状況



埋め戻し作業(砂入れ)



第2図 調査区・基準杭配置図

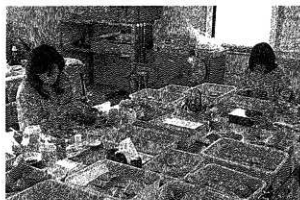
調査記録完了後は、道路造成計画部分については、周溝の上端は削平されることとなるが、周溝底付近は地中に残るため、周溝直上に砂を約5cm入れて保護し、掘削した上土にて埋め戻しを行った。

現地調査は、2010年10月1日から11月17日まで実施した。経過は以下のとおりである。

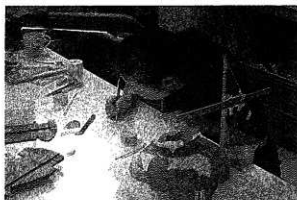
10月1日	調査区1の調査区設定、重機掘削（～5日）
10月5日～	器材搬入、W区人力掘削開始
10月8日	ベルト2付近周溝出土遺物写真撮影、実測図作成
10月12日～	遺物取り上げ、E区掘削開始
10月13日	調査区南壁土層断面写真撮影、実測
10月15日	開口部掘削、ベルト1付近周溝出土遺物写真撮影、実測図作成
10月18日	遺物取り上げ、ベルト1解体
10月19日	完掘、写真撮影

10月21日～26日	実測図作成（26日午前で終了）
10月25日	器材搬出、撤収作業
11月17日	調査区2の調査、記録

整理作業 現地調査終了後、11月8日より整理作業を実施した。出土遺物の洗浄を行い、遺物に古墳名、調査年次、遺物取り上げ番号を記録（注記）した。実測図化が可能な遺物は、接合を行い、脆弱なものなどは、石膏で補強を行った。これら基礎整理が終わったものは、遺物の実測、図化作業を行った。



整理作業



図化作業

4 環境

（1）地理的環境

小鹿山神古墳が位置する有度山は、洪積世に堆積した層が地殻変動によって隆起したことにより形成されたと考えられている。最高地点は307mで、山頂付近は日本平と呼ばれる名勝地である。丘陵は、北側に向かって緩やかに傾斜しているが、南側は駿河湾による侵食により、切り立った急斜面となっている。有度山西麓から西麓にかけては、多くの谷が存在する。谷には、無数の小河川が放射状に流れており、その多くは西側に位置する沖積低地、静岡平野へ流れ込む。それら小河川の流れによって丘陵斜面は削られ、結果発達した開析谷となっている。谷の間には、舌状に延びる丘陵が発達している。小鹿丘陵は、静岡大学が立地する大段丘陵の谷を挟んだ北側にあり、小鹿山神古墳およびその他の小鹿古墳群の各古墳は、その丘陵斜面に展開している。

（2）歴史的環境

ここでは、有度山麓およびその周辺における古墳時代初頭から末にかけての古墳、および墓についてふれておきたい。

弥生時代終末から古墳時代初頭には、有度山西麓の上ノ山遺跡において、円形周溝墓が築かれている。静岡平野において定形的な前方後円墳が築かれるのは、谷津山の柚木山神古墳の出現を待たねばならず、撚形の前方形をもつ滑水平野の神明山1号墳よりも若干遅れると考えられる。静岡平野周辺の前期の古墳はその他にほとんど知られていない。時期不明の古墳として、有東遺跡、静岡市立商業高等学校の南にかつて存在した独立丘陵上に、大型の木棺を伴う杉ノ殿古墳（墳形不明）があったが、現在は宅地化により丘陵自体も消滅している。有度山西麓では、宮川遺跡において前期末から中期初頭頃の円形周溝墓が認められる。また宮川古墳群中には、帆立貝式古墳とも考えられる諏訪神社古墳（宮川4号墳）がある。その後、有度山西麓には、古墳や横穴などが数多く築かれるようになる。日本平動物園周辺に分布する池田山古墳群のほか、静岡大学校内古墳群、宮川古墳群、石原窪古墳群、井庄段古墳群、



第3図 静岡平野南部遺跡分布図 (1:30,000)

伊庄谷横穴群そして小鹿古墳群などである。なかでも、宮川古墳群の丸山古墳は、家形石棺、畿内系横穴式石室をもつ方墳であり、有力な古墳であったと考えられる。

小鹿古墳群は、現状で24基の古墳が知られている。これらのうち谷の奥部に位置する14号墳から18号墳は、1963年に発掘調査が行われ、堀ノ内山古墳群1～5号墳として報告されている（望月1967）。また、東名高速道路および側道建設により丘陵が削平された際に、古墳が数基発見されている。小鹿神古墳は、この小鹿古墳群の第6号墳として登録されている。

第2表 静岡平野南部遺跡一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	有東遺跡	20	小栗蟹田堀合坪遺跡	39	矢塚坪・門前坪遺跡	A	八幡山古墳群
2	鹿ノ道遺跡	21	片山遺跡	40	五輪平遺跡	B	谷津山古墳群
3	登呂遺跡	22	片山庵寺跡	41	寺ノ久保遺跡	C	上ノ山古墳群
4	水洗遺跡	23	宮川遺跡	42	栗原遺跡	D	東大谷古墳群
5	下島遺跡	24	清永寺瓦葺跡	43	道下遺跡	E	日向山古墳
6	汐入遺跡	25	清永寺南遺跡	44	大原坪遺跡	F	片山堀穴群
7	元宮川神明原遺跡	26	井庄度遺跡	45	桃瀬寺前遺跡	G	井庄谷沢穴群北谷支群
8	大谷鶴井之坪野原跡	27	鯛田遺跡	46	東原ノ坪遺跡	H	井庄谷沢穴群南谷支群
9	八幡五丁目遺跡	28	天神寺遺跡	47	宮ノ後遺跡	I	宮川古墳群
10	有東谷跡	29	上ノ山遺跡	48	上中林遺跡	J	静岡大字堀内古墳群
11	有明遺跡	30	ささぎ度遺跡	49	曲金北遺跡	K	奥大谷古墳群
12	八幡山城跡	31	奥大谷遺跡	50	長沼遺跡	L	小鷹古墳群
13	小黒遺跡	32	大段山遺跡	51	堀田遺跡	M	堀ノ内山奥古墳
14	豊田遺跡	33	大段I遺跡	52	本郷坪遺跡	N	池田山古墳群
15	三夏工場内遺跡	34	大段II遺跡	53	仕舞海道坪遺跡	O	谷田古墳群
16	曲金B遺跡	35	堀ノ内B遺跡	54	豊谷山城跡	P	井上邸古墳
17	前ヶ崎遺跡	36	堀ノ内A遺跡	55	豊谷四丁目遺跡	Q	茶臼山古墳
18	曲金A遺跡	37	堀ノ内山遺跡	56	長沼古城跡		
19	小栗杉本堀合坪遺跡	38	本郷寺裏遺跡	57	柚木山神瓦窯跡群		

第2章 調査成果

1 基本層位

調査の基本層位は、大局的には5層である。第6図下段のベルト1土層図を見ると、I層は現地表・畑土（ベルト1土層1層）、II層は茶褐色系土層（ベルト1土層2層）である。III層（ベルト1土層3・5～9層）は黒色土であり、いわゆる有度山の黒ボク土である。有度山に所在する遺跡の多くの包含層がこの層に相当する。IV層（ベルト1土層10層）は、黒色土と地山黄褐色土壌の混層である。周溝の初期の埋没土と考える。その下は、地山層である。遺構外の部分、周溝外南側では褐色土であるが、地山を削り出している周溝部分は、褐色土が消滅し、その直下の黄褐色礫混土が露出している。各土層図では、上記の基本土層番号によらず、土層図ごとに上位から土層番号を付している。

2 遺構

今回の調査で検出された遺構は、墳丘の墳裾、石室の開口部付近（羨道の端）、周溝、墓道である。

(1) 墳丘・周溝

古墳の南側で東西方向に延びる周溝を検出した。周溝は、調査区1のE区、南東コーナーでほぼ直角に屈折して北方へ延びる。石室開口部が周溝下端から始まることを考慮すると、墳丘側の周溝下端は、古墳の墳裾でもある。そのため周溝の幅を上端で計測できず下端で測ると、南周溝は平均3.4m、東周溝は、調査区1北端で3.8mである。周溝の深度は、地形と関係している。古墳の所在するこの丘陵地形は、北東方向から南西方向へ傾斜する地形である。周溝は、地山を削り出して構築されているが、調査区1のW区で検出された、地形上低い側に当たる周溝西半は深く、上端から下端までの傾斜が急である。ベルト2(a-a')でみると外側上端からの深さが80cmである。一方、傾斜の高い側である周溝東半は、浅くなり、同時に周溝上端から下端への傾斜も緩やかになる。ベルト1(b-b')で外側上端からの周溝の深さは約30cmである。中間の石室開口部正面は、周溝よりも一段低い墓道があるが、大局的な周溝の様相としては、西から東へ向かって次第に浅くなる。周溝外からみて最も周溝の浅い部分は、古墳の南東コーナー付近であり、周溝の掘り込みはごくわずかである。コーナーで屈曲して北方へ向かうと、周溝は再び上端と下端との高低差が大きくなり、深くなる。

遺物は、ベルト1付近から西側一帯にかけてと、ベルト2以東一帯に集中していた。遺物は古墳時代後期から奈良時代までの須恵器がほとんどで、若干の土師器がある。意図的に割られているかのようには細片のものが多く、接合によりある程度復元することが出来た。

(2) 石室

石室の開口部付近が検出された。右側壁では、側壁の石が1点だけ検出された。それ以外の石は検出できなかった。地山検出面にわずかな窪みが認められることから、本来あったものが後世に抜き取られていると考えられる。左側壁では石室の石が全く検出できなかった。なお、外腰列石も検出することができなかったが、開口部の境目も細かな窪みなど検出面に乱れがあることから、本来は存在した可能性もある。床面には、ピットが数基検出された。その性格は不明である。検出面からやや浮いた位置で古墳時代後期と律令期～奈良時代の須恵器および土師器が混在して出土している。

(3) 墓道

石室前庭部から南側へ向かって直線的に延びる墓道が検出された。前庭部付近で幅3mである。周溝よりも一段低く造られており、周溝の外端部を切ってさらに南側へ続く。その延長を確認するために設定した調査区2でも検出され、幅2.4m、深さ0.6mを測る。調査区2よりも南側は、次第に傾斜が急になり、谷の落ち際となってくる。この状況より、墓道は、斜面下方まで続くことはほぼ間違いない、麓から古墳群へ至るまでの墓道として機能していたと考えられる。調査区1では、墓道の検出面からわずかに浮いた位置から須恵器片が出土しており、調査区2では遺物が出土しなかった。

3 遺物

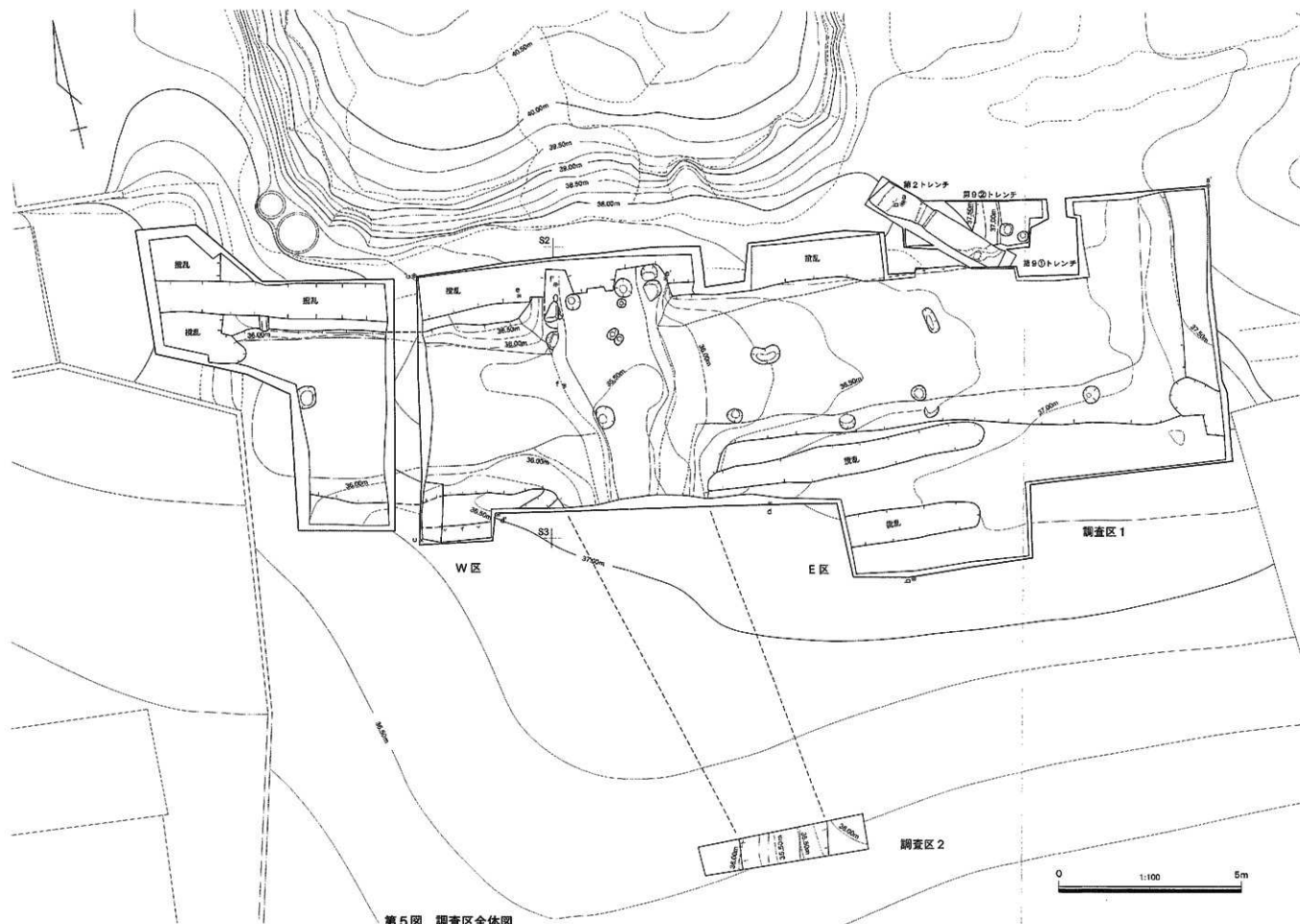
今回の調査で出土した遺物は、古墳時代後期から律令期・奈良時代までの須恵器、土師器である(第12・13図)。いずれも周溝および墓道、石室の開口部から出土したものである。特に周溝から出土したものが多く、出土遺物の傾向としては、高坏が非常に多く、坏類が非常に少ないことが挙げられる。出土須恵器のうち、古墳時代後期のものは在地産(秋葉山窯産のものである可能性が高い)のものが多く、湖西産が少量であるが、律令期以降のものはほとんどが湖西産である⁽¹⁾。

1は坏身である。口径が小さく、口縁部は内傾しており、端部は丸く仕上げられている。底部を欠損しているが浅いつくりで、底部付近はヘラ削りされている。2は、1と比較して口径が大きい。高坏の可能性も考えられるが、底部を欠損しているため特定することができない。口縁部は、はじめに内傾するが、端部で直線的に上方へ伸びる。口縁端部は、やや細く仕上げられている。受け部はわずかに外反しながら横方向へ大きく広がっている。

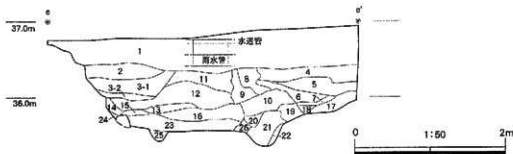
3～18は、高坏である。うち3～8は、二段透かしの脚部をもつ。二段透かしのものは、さらにいくつかの形態に細分できる。上下段の透かしの間に二条の沈線をもつもので、透かしが二方向のもの3・4と、三方向のもの5～7がある。また、特異なものとして、二段の透かしが上下に並ばず、中位に沈線をもたないもの8がある。4・7は、上段の透かしが中まで貫通していない。3は、無蓋高坏である。5・6は大型の高坏である。7の坏部は、上方へ直線的に伸びる口縁部をもつもので、坏と口縁部との間に弱い段をもつ。8は、透かしの特徴のほかに、脚端部が鈎状に屈折する特徴をもつ。9～14は、透かしをもたない脚部の高坏である。9は、脚中位に二条の沈線をもつ。脚端部は、下方にやや伸びて幅広の面をもつ。10～12は、短脚高坏で、坏部が残存する。10・11は、有蓋高坏である。10の内傾する口縁部は短く、端部は丸く仕上げられている。脚部はラッパ状に外反して広がる。11は口縁部が長く上方に伸びる。脚部の広がり、10よりも弱く、短く屈曲して外反する端部には面をもつ。12は、10と



第4図 小鹿山神古墳全体図

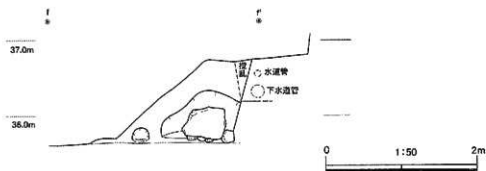


調査区1北壁



- | | | |
|--------------------------------|-----------------------------------|----------------------------------|
| 1 埋め土 | 9 黄褐色土・黒色土混層 | 17 黒色土・黄褐色土互層 (約 5cm の互層) |
| 2 黄褐色土 (黄褐色土・埋め土) | 10 暗褐色土 (黄褐色土小ブロックを多く含む) | 18 暗褐色土 (しまり強い) |
| 3-1 茶褐色土 (黄褐色土) | 11 黒色土 (茶褐色土をやや含む) | 19 黒色土・暗褐色土混層 (しまり強い) |
| 3-2 黄褐色土・黄褐色土混層 (黄褐色土・暗褐色土の混層) | 12 黄褐色土 (黄褐色土小ブロックを多く含む、11 より明るい) | 20 黒色土 |
| 4 茶褐色土・黒色土混層 (埋め土) | 13 黄褐色土 (黄褐色土小ブロック・小塊を含む) | 21 暗褐色土・黒色土混層 (3 ~ 5cm 程度多く含む) |
| 5 黄褐色土・黒色土互層 | 14 黄褐色土・茶褐色土混層 | 22 黄褐色土 (1 ~ 3cm 程度含む、しまり強い) |
| 6 黄褐色土 (茶褐色土小ブロックを多く含む) | 15 黒色土 (厚さ 3 ~ 5cm 多い) | 23 黄褐色土・黄褐色土混層 (3cm 前後程度含む) |
| 7 暗褐色土 | 16 黒色土 (暗褐色土を含む) | 24 黄褐色土 (黄褐色土を混じる) |
| 8 黄褐色土 (黄褐色土小ブロック・塊をわずかに含む) | | 25 黒色土・黄褐色土混層 |
| | | 26 黄褐色土混層 (しまりややあり、3 ~ 5cm 程度含む) |

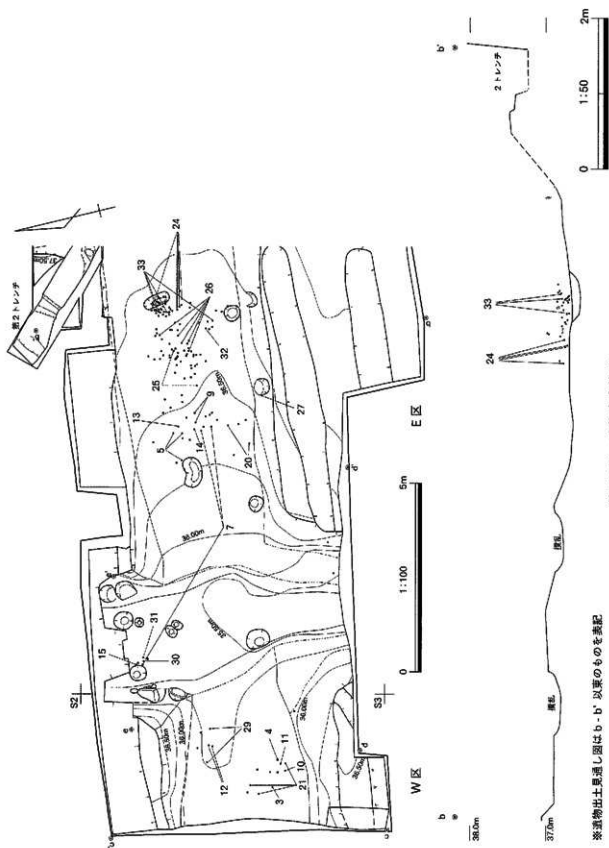
第8図 調査区1土層図③



第9図 主体部西壁

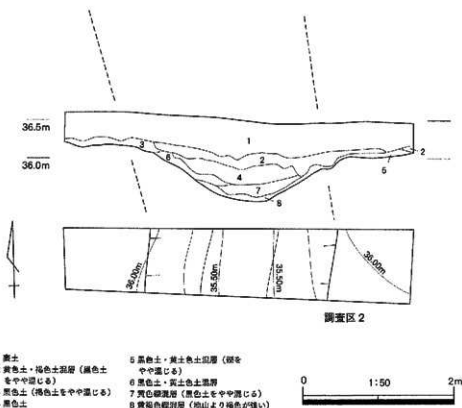
似た脚部形状をもつ。13は、無蓋高坏である。坏部は碗形で、口縁部には浅い沈線をもつ。脚部はいずれも脚部を欠損しているが、残存部から有蓋高坏と考えられるものである。15・17は、口縁部の立ち上がりが高く内傾するもので、受け部径は比較的小さい。16・18は、口縁部の立ち上がりが上方へ伸長し、受け部径は大きい。19は、裝飾須恵器の蓋である。蓋部には、刺突文がめぐり、三重つまみがつく。器面には自然釉が付着している。釉の色調や胎土から、湖西産物の可能性が考えられる⁽²⁾。

20は、ハソウである。口縁部と体部の接合部は細く、ラッパ状に広がる口縁部は、上位の段で屈折し上方へ長く伸びる。口縁部は、上二段にへうの連続跳ね上げ文、下段に櫛刺突文、体部にも沈線で区画された二段の刺突文帯をもつ。注口は外へ突出しない。21は、脚付短頸壺と考えられる。球形の体部をもち、上半を欠損している。脚部は有段脚で、正対しないが二方向の透かしをもつ。22は、盤である。深碗形の体部の上に、二条の沈線と上方へ伸びる口縁部をもつ。23は、フラスコ瓶である。ラッパ状に広がる頸部は、口縁部で外反し、端部で上下に薄く広がる端面をもつ。外面全体に自然釉がついている。24は、平瓶である。口縁部は、上方に拡張する。体部上半には円形の貼り付け文が二つ



※遺物出土見通し図はa・b'・c'のものを表記

第10図 遺物出土状況



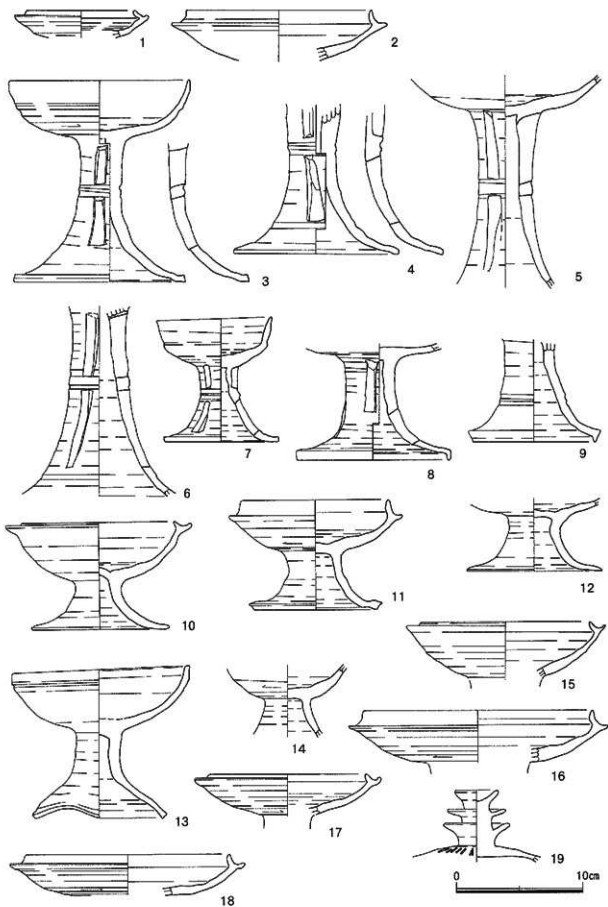
第 11 図 調査区 2

付いている。また、器面全体に自然釉がつく。25 は、大型甕である。頸部および体部の一部のみの破片である。頸部の沈線より上は、跳ね上げ文が密に施文されている。体部の叩き痕は格子状であり、内面には当て具痕の青海波文が見られる。26・28 は台付長頸甕、27 はその蓋である。26 は、意図的に割られていたかのように破片となっていた。頸部には、沈線の間に二段の櫛刺文が施文されている。体部の上半にも櫛刺文が施文され、下半はヘラ削りされている。脚台部は、ハの字状にふんばった形状である。

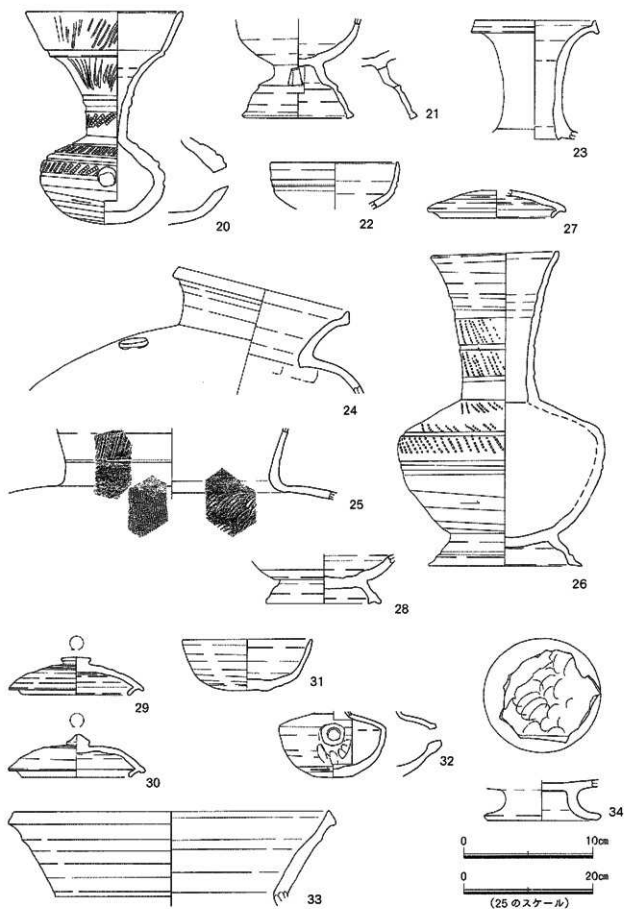
29～33 は、返り蓋とそれに伴う坏の段階以降の須恵器である。いずれも瀬西産である。29・30 は、坏甕である。いずれも、やや反りながら内傾する返りをもつ。摘みは、29 が扁平、30 が宝珠形である。31 は坏身である。底部がやや広がるが箱形にまではならない。口縁部は細くなり、端部は丸みをもつ。外面にはヘラ削りが施されていない。32 は、ハソウである。注口は、外に突出している。底部付近はヘラ削りされている。33 は、甕である。斜め上方に広がる口縁部は、途中に 1 条の細い稜をもち、やや幅広の端面をもつ。34 は、甕内系土師器の甕である。緻密な胎土で、赤褐色である。平らな内面には、螺旋状を志向した暗文が見られるが、やや不揃いである。脚部は強く外反しており、横ナデされている。

註

- (1) 遺物の産地および器種等について、鈴木敏則氏よりご教示をいただいた。
- (2) 三重つまみの類別は不明だが、つまみの上に鉢状の小型窯が付く特殊な長頸甕の蓋が知られており、その変形の可能性があることを、柴垣勇夫氏よりご教示いただいた。



第 12 図 出土遺物①



第 13 図 出土遺物②

第3章 考察

1 墳丘の形状と規模

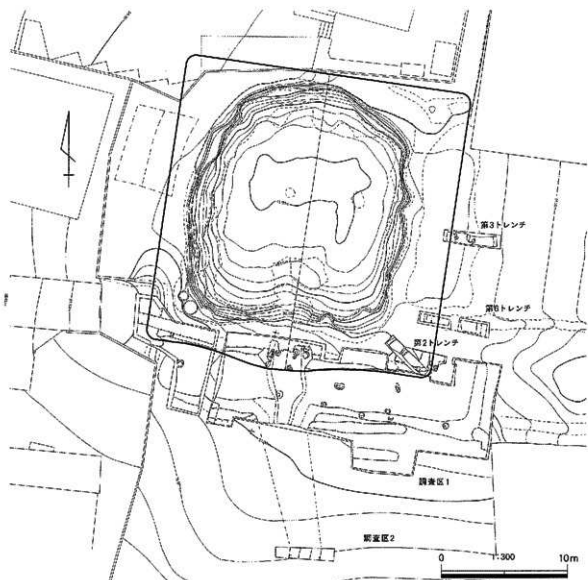
静岡大学考古学研究室は、2009年に実施した測量調査の結果と、同年に静岡市が行った確認調査の結果をふまえ、小鹿山神古墳の墳丘復元案を提示している（静岡大学考古学研究室 2010）。それによると、古墳は一辺 25 m の方墳と推定している。今回の調査結果では、南側墳裾の大部分が検出できたため、それをもとに再度墳丘の全形を復元してみたい。

今回の調査では、古墳の南東コーナーの位置をほぼ特定することができた。また、調査区 1 を横断するように墳裾が検出されている。これらの結果から、まずは墳形が方墳であることは間違いないといえよう。また、E 区で検出された墳裾を延長していくと、2009 年の確認調査第 2 トレンチの傾斜変換ラインに接続し、北方へ屈折する。その後墳裾は、確認調査第 6、第 3 トレンチへと続いていく。これらの検出状況から、第 2 トレンチで検出した傾斜変換ラインは墳裾に限りなく近く、その屈折部がほぼ墳丘のコーナーと見てよいと思われる。本調査区、確認調査第 6 トレンチ、第 3 トレンチの墳裾を結んだ東辺は直線とせずやや歪みがあるが、墳丘構築時あるいはその後の崩落等によって生じた誤差として捉えるしかない。第 14 図では、墳丘構築当初の意匠を考慮して、直線で復元している。主体部は、前庭部付近の石のほとんどが抜かれているため、本来の石室幅は不明であるが、残存する石から右側壁の位置を特定することができる。また左側壁では、地山掘り方と石の抜き痕と思われる地山の窪みが検出されている。左側壁における窪みと地山掘り方との位置関係は、右側壁の地山掘り方と石の位置関係とほぼ同じであるため、窪みの内側端を左側壁面と仮定すると、石室は前庭部で幅約 2.4 m となる。大正時代の主体部発掘記録によると、羨道幅は 1.82 m であるため、検出された前庭部の方が約 60 cm 広いことになる。前庭部から羨道へ進むに従い、幅が狭くなっていく形状が想定できよう。

また、上記の前庭部幅の推定復元により、西側から 1.2 m 東を古墳の主軸と捉えることができる。古墳の主軸から、墳丘の南東コーナーまでの距離は、11.5 m となる。主軸を中心に同じ幅で東西の墳丘が構築されていたと考えれば、古墳の南辺は 23 m となる。この数値は、上述のとおり静岡大学考古学研究室が推定した数値 25 m と 2 m 差であり、その推定値がほぼ正確であったことがわかる。今回の調査では、古墳の南北幅を復元するための情報を得ることができなかったが、静岡大学考古学研究室の復元案を援用して平面形は正方形であったとし、23 m 四方として復元する。ただし、周溝よりも一段低い墓道が設けられたことで、開口部付近はその分外へ張り出した形状となるため、墳裾南辺は直線を描かず開口部では南北約 24 m になる（第 14 図）。

2 出土土器と古墳の時期

これまでの確認調査と今回の発掘調査における土層観察や出土遺物の検討を基に、古墳築造から現在に至るまでの小鹿山神古墳の経緯について再度整理しておきたい。開口部付近に設定された確認調査第 8 トレンチの土層観察から、大正時代の発掘の際に、礫床の礫を主体部外へ排出した様子が窺えた。ところが、それより下層の黒ボク土系土層が堆積する段階で、すでに外護列石や開口部付近の側壁の石が解体されていたことが分かった。確認調査や今回の発掘調査において前庭部や周溝から出土した土器には、律令・奈良時代のものが含まれており、周辺の古墳と同様に当該時期まで追葬が行われていた可能性のあるものの、その後間もなくして盗掘、破壊を受けた可能性が考えられる。つまり、古墳築造後から律令・奈良時代まで追葬行為が行われ、周溝が埋没しない間に石室の一部が解体（盗掘）される。その後の土の堆積が進み、大正時代になって主体部の発掘が行われ、石室の礫床が排出されたという経緯が窺えるのである。



第14図 墳丘復元図

ところで、静岡大学考古学研究室は、東京国立博物館に寄贈された主体部副葬品の調査を行い、馬具、武器類等の金属製品および須恵器から古墳の構築時期について分析している（静岡大学考古学研究室 2010）。それによると、馬具のうち杏葉は若干時期が降る可能性があるものの、辻金具の形態より須恵器編年の TK209 式并行と考えられる。また、須恵器は、高坏が TK209 式并行期、遠江須恵器編年Ⅲ期後葉（鈴木 2001）に比定され、出土した須恵器中では古相のものである。そのため、本古墳の築造時期を 6 世紀末と捉えている。

今回の調査で出土した遺物をみると、ハソウ 20（第 12・13 国遺物番号に対応。以下同）は、頸部と体部の接合部がやや細い。体部高に対して口頸長がやや長い点や、ヘラや櫛による文様が口縁部から注口まで施文されている点は、古相の要素といえるが、形状から TK209 式并行（遠江須恵器編年Ⅲ期後葉）に比定できよう。明らかに坏類と認められ、図示できたものは少なく、1 の坏はⅢ期末（7 世紀初頭）に降る。一方、多く見つかった高坏の中でも 5・6 は、賤機山古墳や丸山古墳でも出土している大型の長脚二段透高坏である。坏部まで復元できたものがなかったため、全体形状が不明であるが、16・17 のような坏部が付くとみて相違ないであろう。受け部径が大きく、口縁部はわずかに内傾しながらも端部で上方に伸びる。坏底部付近はヘラ削りされている。これらの特徴から、TK209 式并行期

よりも一段階古く、TK43 式併行期（遠江須恵器編年Ⅲ期中葉）に遡る可能性がある。ただし、確認できる点数が限られており、その他はほとんどが TK209 式併行期以降のものであるため、現状では古墳の築造は TK209 式併行期として捉えておくが、一段階遡る可能性もあり、今後再検討する必要がある。

3 小鹿山神古墳と静岡平野における古墳時代の階層性

静岡平野地域では、古墳時代後期になると群集墳が数多く形成される。なかでも有度山西、北西麓や丸子丘陵は非常に多い。これらの群集墳の中でも有力古墳と考えられる、墳丘規模や主体部の大きなものは、賤機山古墳を除くと、方墳が非常に多いことが本地域の特色である。古墳の研究は、静岡県内でも精力的に行われており、墳丘や主体部の形状、規模等を基にした分析、また副葬品からの分析など様々な研究成果が出されている。先の静岡大学考古学研究室による本古墳の報告書でも取り上げているように、静岡平野付近の古墳の階層性に関する研究もなされており、近年では、副葬品の詳細な分析を基に階層構造を見出す研究成果も出されている（大谷 2000、菊池 2006）。

当然のことながら、古墳は墳丘、主体部、副葬品といった様々な要素をもっており、その分比較検討されるべき分析項目もまた多岐にわたる。各々の要素は、古墳を構成する一部にすぎないため、そのひとつを基に古墳全体の性格づけを行うことは若干の危険を伴う。やはり、古墳を基に地域の階層構造について考える場合、墳丘や主体部の形状や規模、副葬品の種類や数量を整理して、地域の実態を考慮しながら総合的に比較検討して導き出すことが重要である。

静岡大学考古学研究室は、静岡平野付近に見られる方墳を集成し、小鹿山神古墳とその他の方墳について、墳丘の規模等についての比較を行っている（静岡大学考古学研究室 2010）。今回の調査結果により、推定されていた墳丘の規模は 23 m 四方の方墳である可能性が高くなり、他の方墳と比較しても最も大きなグループに含められる。静岡平野地域において小鹿山神古墳と近い規模の方墳としては、宗小路 19 号墳、アサオサン古墳、丸山古墳、佐渡山 2 号墳、上ノ山 7 号墳が挙げられる。小鹿山神古墳の被葬者の階層について考える場合、これらの古墳との比較が必要となる。そこで、ここでは古墳の墳丘、主体部の形状や規模等のほか副葬品について整理し、階層について再考してみたい。

先にあげた宗小路 19 号墳、アサオサン古墳、丸山古墳、佐渡山 2 号墳、上ノ山 7 号墳、そして小鹿山神古墳であるが、比較の前提として本来は時期の整理が必要になる。残念ながら、一部に公表されていない資料があるため、出土遺物に基づく时期的検討が現段階では難しく、今後の課題としておきたい。現在のところ、これらの古墳の築造年代はいずれも、6 世紀末頃と考えられているため、築造時期が概ね同時期という前提になって、それ以外の要素について比較しておく。

各古墳の基本データは、第 3 表のとおりである。墳丘はいずれも、一辺 18 m を超えており、うち佐渡山 2 号墳、上ノ山 7 号墳、そして小鹿山神古墳は一辺 20 m を超える規模をもつ。なかでも佐渡山 2 号墳は 27 m × 28 m であり、突出した規模をもっている。小鹿山神古墳は、前述のとおり 23 m 四方と考えられ、それに次ぐ規模をもつ。主体部に着目してみると、アサオサン古墳と上ノ山 7 号墳は、石室形態が類似両袖型であり、その他が片袖型または両袖型であるため、畿内系石室とそうでないものとして区別される。上ノ山 7 号墳は、帰属する上ノ山古墳群に 17 m × 18 m の 6 号墳や、一辺推定 17 m の 9 号墳があることから、同古墳群内に近い規模をもつ古墳がいくつかあったと考えられ、明らかに他と区別される有力古墳といえる状況ではない。また石室形態がいずれも疑似両袖型であることを含め考えれば、小鹿山神古墳など他の古墳と比較しても上位階層者の墳墓として捉えることはできないであろう。また、アサオサン古墳は、丸山古墳と同じ宮川古墳群である。石室形態から丸山古墳が上位に位置づけられる公算が強い⁽¹⁾。そのため、同一古墳群中で最も階層が高く、かつ静岡平野地域でも階層が高いと考えられる古墳は、宗小路 19 号墳、丸山古墳、佐渡山 2 号墳、小鹿山神古墳に限られてくる。

第3表 古墳基礎データ比較

位 置	佐渡山2号墳	小島山神古墳	宗小路19号墳	丸山古墳	久保山古墳	上ノ山5号墳
墳丘規模	27×28	23×23	18×18	18×18	18×18	21×22.5
石室形態	片袖	両袖	両袖	両袖	無袖?→板付片袖	板付両袖
石室長さ	15	12.7	11.1	9.7	13.5	14
玄室長さ	3.4	8.2	4.6	4.1	5.6	5.6
副葬品	馬具	鞍1	鍬1、鞍3、鍬具3、連布2、赤銅板付物1	鍬具2、鍬具7、板板		
	武器・武具	鉄鍬1、大刀3	大刀1	鉄鍬74、大刀5、(銅2) (銅鍬金具1)	鉄鍬26、大刀5	鉄鍬7、大刀2
	その他	刀子1、止金具1、止金具1	刀子1	刀子3	刀子4、(銅2)	刀子5
	馬具		香爐1、雲珠1	板板1、香爐6、止金具22、鍬具1、鍬具金具1、鍬具金具9、赤銅板付物1		
金銅製品	武器・武具			(把頭)1、(大刀鍬金具)1、(銅鍬板頭納骨)1		
	その他	(銅鍬金具1)、耳環1、鍬1	(銅鍬3)	耳環1、耳環5、空玉?	耳環10	耳環1
備考		大正5年主体発掘調査、東京国立博物館へ寄贈された遺物。	数量は出土点数(板片数)。	家形石棺	鉄鍬、大刀の数量は出土点数(板片数)。追跡時石室改変	全体に損傷を受けている。出土遺物少。丸玉、大刀、鍬具、銅鍬出土。

次に、古墳の副葬品の種類や数量についてみてみたい。言うまでもないが、出土遺物は、盗掘などの影響により、種類や数量は大きく左右されている。例えば丸山古墳は、攪乱(盗掘)を受けており、出土点数が少ない。小島山神古墳の出土遺物も、現在知られているのは東京国立博物館に寄贈された種類と数量のみである。そのため、確認されている副葬品は、本来のその一部にすぎない可能性が高いことを念頭に置きながら、その傾向について見てみたい。

宗小路19号墳は、石室の開口部側は盗掘を受けていたが、玄室奥は天井石が崩落していたことで盗掘を免れ、出土した副葬品の種類及び数量が豊富であった。馬具は鉄製の轡、雲珠、鞍のほか、金銅製の雲珠、轡、香囊などがある。また武器類でも獅喚環頭柄頭などの金銅製品が出土している。丸山古墳は盗掘を受けており、出土した副葬品は少ない。金銅製品は耳環に限られ、ほかは鍬具や鏡板など鉄製の馬具や、鉄製の大刀などであった。小島山神古墳は、金銅製の香囊や雲珠が1点ずつあるほか、鉄製の鞍、大刀がそれぞれ各1点、東京国立博物館に寄贈されている。佐渡山2号墳は、金銅製品として、止金具や鉄鍬金具のほか耳環、鏡がある。鉄製品には鍬、素環轡、鉄鍬、大刀などが出土している。

大谷宏治によると、金銅製の馬具や武器類を複数有するものは、上位階層に位置づけられるとしている(大谷2000)。また大谷は、副葬品に見られる鏡、武器、馬具、裝飾付大刀といった威信財の保有数を基に階層を設定し、階層1=上位首長層、階層2=下位首長層、階層3=有力家長層など計7階層のモデルを提案している。この基準に基づき、小島山神古墳の出土遺物から階層を考えれば、静岡大学考古学研究室が考察で述べたとおり階層3に留まるのであろうが、先述のように盗掘など古墳がその後におかれた環境により、出土した副葬品は大きく影響を受けている。小島山神古墳が本来有していたその他の金銅製馬具や武器・武具の存否を推測することは困難であるが、墳丘規模と比較して既知の副葬品があまりにも少なすぎる。少なくとも、奈良時代以降に石室が破壊を受ける以前、副葬品はもっと多かったと考える方が自然であろう。大谷は、「階層①～⑦は明確に区分されるものではなく重複部分もあり、個々の古墳を位置づける場合には検討が必要である」とことや、高島徹の指摘を引用して「古墳・埋葬施設の規模及び副葬品全体で階層性を表示していたことを確認することができる」と述べている。冒頭で述べたことと重複するが、小島山神古墳も墳丘の規模、石室の規模、形状を合わせ考える必要がある。大谷は、本稿で取り上げた古墳のうち佐渡山2号墳を階層2以上の首長階層としている。宗小路19号墳も金銅製の裝飾付大刀や馬具を複数保有していることから階層2以上に位置づけられる可能性

が高い。小鹿山神古墳は、残念ながら副葬品からの積極的な言及をすることはできないが、宗小路19号墳よりも大きく当該地方で最大クラスの墳丘であることと、大型の両袖型横穴式石室をもつことを考えれば、やはり佐渡山2号墳と並び静岡平野地域の有力な首長階層の墳墓として位置づけられる可能性が高いのではないだろうか。

古墳の様相から階層について考える場合、目的を明確にする必要がある。つまり、古墳の分析をととして古墳という遺構の序列化を目的とするのか、その被葬者が属していた階層社会の復元を目的とするのかということである。おそらく大半の場合は後者で、前方後円墳体制（都出1991）といった語に表されるように、古墳に見られる墓制・葬制の偏差を分析することで、古墳時代に顕在化する階層社会を導き出すことに主眼があると思われる。古墳の様々な要素を比較すると、墳墓および主体部の構築は、被葬者のなかでも第一被葬者を埋葬するために行われる行為と考えられるため、第一被葬者の階層をより顕著に表している可能性が高い⁽²⁾。後期の場合は特に、副葬品は、追葬行為などにより第一被葬者埋葬時からの改変のおそれがあるため、型式分類による時期的検討を行う必要がある。また盗掘による欠落等もあるため、種類の有無や量の多少など、評価は慎重になる必要がある⁽³⁾。本稿では、古墳を比較する際に副葬品の出土地点や帰属時期についてふれていないため、十分な比較検討が出来なかったが、今後このような視点にたって分析する必要がある。

註

- (1) アサオサン古墳と丸山古墳の間には、これまでの宮川遺跡の発掘調査の結果から、小規模な谷状地形が想定されている（静岡市教育委員会2010）。そのため、同一の古墳群として現在捉えられているが、古墳の遺基集団が同一であったのかは検討の余地がある。
- (2) 墳丘や主体部についても、実際には古墳の築造が第一被葬者の生前か没後か分かっていないという問題もある。そのため、必ずしも第一被葬者の社会的地位のみを反映するものとは言えなくなる。また、アサオサン古墳は、追葬時に立柱石が追加され、擬似片袖型に石室が改修されているようであるため（静岡市教育委員会1975）、主体部形状も追葬時の変更があることに注意する必要がある。
- (3) 副葬品は階層のみでなく、職掌などを示すといった意見もある（林2010）。いずれにしても、階層社会とは、弥生時代以降に社会が円熟化、複雑化していくなかで抽出される一側面に過ぎないため、副葬品に限らず、考古資料から抽出される偏差、格差を多角的な視点から検討する必要がある。

参考文献

- 大谷宏治 2000 「遠江・駿河における古墳時代後期の階層構造」『研究紀要』第7号、静岡県埋蔵文化財調査研究所
菊池吉修 2006 『鐏大刀集成 静岡地域』『東海の馬具と鐏大刀』東海古墳文化研究会
建設局中部地方建設局・西宮神社・静岡市教育委員会 1984 『佐渡山2号墳発掘調査報告書』
静岡市教育委員会 1975 『駿河宮川遺跡～広野大谷線事業地内埋蔵文化財調査昭和48年度（第1次）概報』
静岡市教育委員会 1984 『佐渡山2号墳発掘調査報告書』
静岡市教育委員会 2010 『宮川遺跡第5次発掘調査報告書』
静岡大学考古学研究室 2010.3 『小鹿山神古墳～静岡市小鹿山神古墳測量調査・出土遺物調査報告書』
鈴木敬則 2001 『湖西系古墳時代須恵器編年の再構築』『須恵器生産の出現から消滅～補遺・論考編』東海土器研究会
都出比呂志 1991 『日本古代の国家形成論序説～前方後円墳体制の提唱～』『日本史研究』343号
林正憲 2010 『古墳時代における階層構造』『考古学研究』57-3、考古学研究会
望月薫弘 1967 『駿河堀ノ内山古墳群』静岡考古館

第4章 総括

静岡大学人文学部教授 滝沢 誠

小鹿山神古墳は、大正期に横穴式石室が発見されて以来、長らくその実態が不明のままとされてきた古墳である。しかし、旧歴史などが伝える大規模な横穴式石室や割拔式石棺の存在（静岡縣 1930）は、本古墳が古墳時代終末頃における静岡地域屈指の有力古墳であることを示している。

2009年8月、その実態解明を目指した静岡大学考古学研究室は、本古墳について初めての測量調査を実施した。その結果、本古墳は従来言われるような円墳ではなく、方墳である可能性が高くなった。はからずも同年11月には、本古墳の裾部付近に下水管工事がおよぶこととなり、静岡市が緊急の試掘調査を実施した。この調査では、各トレンチで墳端が検出され、結果として、本古墳は方墳であることがほぼ確かめられたのである（静岡大学人文学部考古学研究室 2010、静岡市教育委員会 2010）。

今回の発掘調査は、近年にわかに調査が進んだ本古墳の実態を把握する上で、さらに重要な多くの情報をもたらすこととなった。記録保存のための事前調査となった点は誠に残念であるが、そこで得られた情報は、本古墳の歴史的価値を認識する上できわめて貴重な内容を含むものである。以下、今回の調査成果を整理した上で、本古墳をめぐる歴史的解釈について若干の私見を述べておきたい。

まず、今回の調査における第一の成果は、墳形と規模に関する明確なデータを得ることができた点である。すでに近年の調査によって、本古墳が方墳であることは確実視されていた。しかし、このたび、墳丘の南側で東西方向に延びる直線的な周溝とその南東コーナー部を検出したことは、本古墳が方墳であることを決定づける事実としてきわめて意義深いものである。

さらに今回の調査では、南側周溝の中央部で石室の開口部を確認することができた。そこで、石室開口部の中軸線を古墳の中軸線と仮定し、周溝内側の下端部を基準に墳丘規模を復元すると、南辺の長さには23.0 mとなる。南北方向の規模はなお不明であるが、この東西23 mという規模は、静岡地域に分布する方墳の中では佐渡山2号墳（28 m × 27 m）に次ぐ規模である。

第二の成果は、いまま触れたとおり、横穴式石室の開口部を確認することができた点である。本古墳の埋葬施設については、大正期に発見された横穴式石室の存在が知られている。石室は現在埋め戻されているが、当時の記録によると、玄室長8.2 m、同高3.6 m、奥室幅2.42 m、羨道長4.5 m、同幅1.82 mを測る大規模な石室である。また、石室内には5基の石棺があり、奥室側の2基は伊豆石製の割拔式石棺であったという。この石室規模は静岡地域有数のものであり、ほぼ同時期の割拔式石棺は、賤機山古墳と駿河丸山古墳で畿内系石室にともなう家形石棺が知られているのみである。ただし、記録に残る特徴から判断する限り、本古墳の石室には畿内系石室との構造的な差異もうかがえる。

今回確認した石室開口部の基底面は、周溝底よりもさらに一段下がった位置にある。また、その標高に玄室高（3.6 m）などを足した高さは、現墳頂部高にほぼ相当する。これにより、石室の基底面は今回確認された開口部からほぼ同一レベルで玄室につづき、石室の下半部は地山を大きく掘り込むかたちで地表面下に構築されているとみることができる。加えて今回の調査では、開口部からつづく墓道が周溝を貫いてさらに前方へと延びていく状況が確認されている。その点も含めて考えると、やはり本古墳の石室は、賤機山古墳から駿河丸山古墳へと変容を遂げる畿内系石室の影響を受けながらも、より在地色の強い石室として構築された可能性が高いと推測されよう。

第三の成果としては、これまでにない多くの遺物が出土した点があげられる。前章で検討されたように、今回出土した須恵器のうち、一部の高弁は陶器編年TK43式併行期に遡る可能性がある。しかし、そのほとんどは陶器編年TK209式併行期以降に位置づけられるものであり、この点は、東京国立博物館に所蔵されている過去の出土遺物の年代観とも矛盾しない。したがって、あらたな資料が追加された

現段階においても、本古墳の築造年代は、TK209 式併行期の範囲内でとらえておくのが妥当であろう。

ところで、出土した須恵器の多くは本来石室内に副葬されていたとみられるが、その組成において高環の比率がきわめて高い。しかもその主体をなすのは、大小の長脚二段高環である。これらの高環と脚付長頸壺の組合せは、近隣では賤機山古墳や駿河丸山古墳など、ごく限られた有力古墳のみに認められる（前田 2007）。こうした須恵器の副葬状況も、本古墳の優位性を示す証左となり得る可能性がある。

以上、簡単ではあるが、今回の調査成果を 3 点にわたって整理してみた。その上であらためて問題となるのは、終末期方墳としての本古墳の位置づけであろう。

近畿地方では、6 世紀末（TK209 式期）をもって前方後円墳の築造が停止し、それにかわる大王墳や有力首長墳として大型の方墳が登場する。そうした最上位墳としての方墳については、当時政権の中枢にあった蘇我氏との関係を指摘する有力な意見がある（白石 1982）。また、当該期の方墳集中地帯である房総半島においても、蘇我氏との関連が指摘されている（安藤 1992）。

本古墳が位置する静岡地域においても、かねてから方墳の分布が指摘されており（植松 1994）、蘇我氏関連氏族である阿倍氏との関係も取りざたされている。しかし、今回方墳であることが確定となった小鹿山神古墳を含めて、これまでに確認されている静岡地域の終末期方墳は、いずれも有度郡域に分布するものである。一方、終末期方墳の中でも優位性を示す駿河丸山古墳と小鹿山神古墳は、埋葬施設にかかわる諸要素において、安倍郡域に所在する賤機山古墳（円墳）との関連がうかがえる。そうした方面からの系譜的（氏族的）理解は今後の課題と言わざるを得ないが、ここでは本古墳の歴史的理解を進めるための考古学的論点として、次の 2 点を提示しておくことにしたい。

第一の論点は、有度郡域の後期・終末期古墳から復元される政治的領域についてである。じつは、終末期方墳の出現に先行する 6 世紀代に静岡地域で埴輪を採用している古墳は、有度郡域に分布する有力古墳に限られている。すなわち、のちの郡（評）の母胎となり得る有力者層の紐帯や領域の形成は、終末期方墳の存在を媒介としつつ、古墳時代後期にまで遡る可能性が指摘できるのである。

第二の論点は、有度郡域と関東諸地域との交流関係についてである。有度郡域に分布する 6 世紀代の埴輪はいずれも関東系の埴輪であり、低位置突帯埴輪は房総の東京湾岸地域と、形象埴輪は上野地域との関連をうかがわせるものである。こうした理解が正しいとすれば、そのいずれもが関東における終末期方墳分布地帯と重なり合う。前代に関東諸地域との交流関係を有することが、当地域における終末期方墳の出現と何らかのかかわりをもつのか、より東側をも視野に入れた検討が必要となりそうである。

本古墳の歴史的理解を進めるためには、さらに多方面にわたる議論が求められることは言うまでもない。いずれにせよ、小鹿山神古墳は、静岡市内に現存する終末期方墳としてきわめて重要な歴史的価値を占めるものであり、まずは今後の保護に向けた認識を各方面で共有することが肝要であろう。

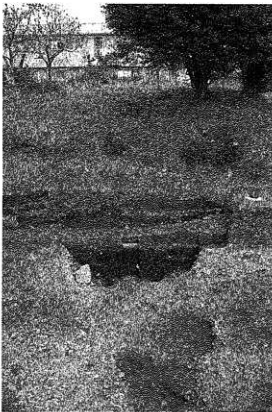
参考文献

- 安藤鴻基 1992 『終末期方墳』『国立歴史民族博物館研究報告』第 44 集、国立歴史民俗博物館
植松章八 1994 『静岡平野における後期の方墳について』『転機』5 号
静岡縣 1930 『静岡縣史』第 1 巻
静岡市教育委員会 2010 『静岡市内遺跡群発掘調査報告書（平成 21 年度）』
静岡大学人文学部考古学研究室 2010 『小鹿山神古墳－静岡市小鹿山神古墳測量調査・出土遺物調査報告書－』
白石太一郎 1982 『畿内における古墳の終末』『国立歴史民族博物館研究報告』第 1 集、国立歴史民俗博物館
前田 健 2007 『古墳出土須恵器からみた須恵器の使用者と生産者』『静岡県考古学研究』39、静岡県考古学会

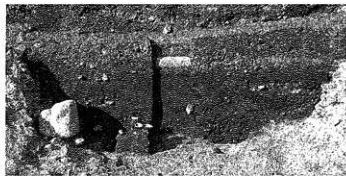
図版第 1



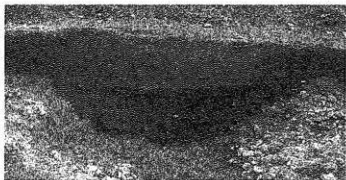
1. 調査区 1 全景



2. 石室開口部と墓道



3. 開口部土層

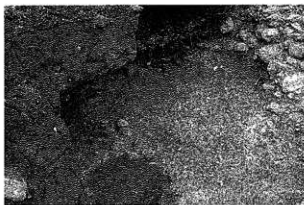


4. 調査区 1 南壁墓道土層

図版第2



5. 西側壁深掘り



6. 東側壁深掘り



7. 開口部遺物出土状況



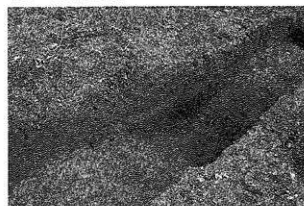
8. ベルト2東遺物出土状況



9. ベルト1西遺物出土状況

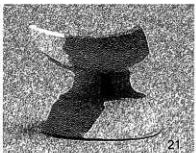
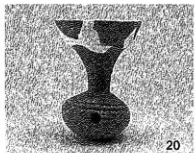
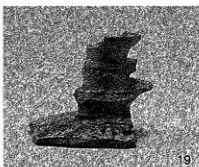
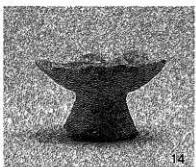
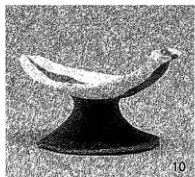
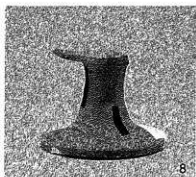
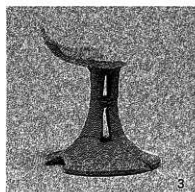


10. ベルト2土層

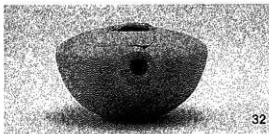
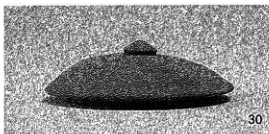
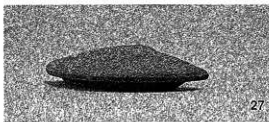
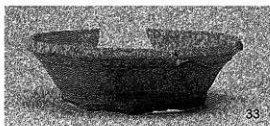
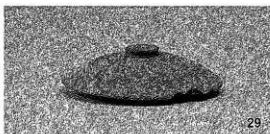
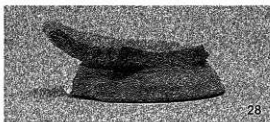
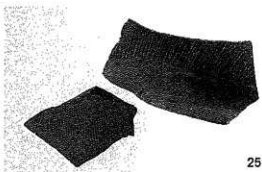


11. 調査区2

図版第 3



図版 4



「小鹿山神古墳発掘調査報告書」正誤表

下記の箇所に誤りがありましたので、訂正くださいますようお願いいたします。

21 頁	4 行目	(誤) 高塚が TK209 式並行期 (正) 高塚が TK209 式並行期
22 頁	22,25,31,33,35 行目	(誤) 上ノ山 7 号墳 (正) 上ノ山 5 号墳
22 頁	34 行目	(誤) 形態が擬似西袖型であり、 (正) 形態が擬似片袖型および擬似西袖型であり、
23 頁	第 3 表	上ノ山 5 号墳の石室形態 (誤) 擬似両袖 (正) 擬似両袖

報告書抄録

ふりがな	おしかやまのかみこふんはつつちょうさほうこくしょ							
書 名	小鹿山神古墳発掘調査報告書							
副 書 名								
シリーズ名	静岡市埋蔵文化財調査報告				シリーズ番号			
編 著 者 名	小泉祐紀 / 滝沢 誠							
編 集 機 関	静岡市教育委員会							
所 在 地	静岡市葵区追手町 5 番 1 号							
発行年月日	2011 (平成 23) 年 3 月 15 日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号					
オシカヤマノカミコフン 小鹿山神古墳	オシカヤマノカミコフン 静岡市駿河区 小麓 1142-4 地	22201	市 B108-6	34° 58' 08"	138° 25' 49"	20101001 ～ 20101117	220 m ²	道路造成及び 宅地造成 に伴う 記録保存調査
種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
古 墳	古墳時代後期		横穴式石室（開口部付近）、周溝、墓道		土器（須恵器・土師器）			
要 約	小麓古墳群の小麓山神古墳は、古墳時代後期、6 世紀第 4 四半期に築造されたと考えられる古墳である。本書は、2010 年に実施された同古墳の発掘調査報告書である。 調査区は、古墳の南辺周溝部分に設定され、周溝および石室の開口部、埴輪、墓道が検出された。それにより、墳丘は東西 23 m、南北 23 m の方墳であると推定される。また墓道は、周溝よりも一段深く掘りこまれており、15 m 以上南まで延長している。このような墳丘の規模のほか、大正 5 年に当時の地主による発掘で明らかとなった主体部の構造、出土遺物などから、静岡平野地域のなかでも有力な首長古墳と考えられる。							

静岡市埋蔵文化財調査報告

小鹿山神古墳

発掘調査報告書

発行日 平成 23 (2011) 年 3 月 15 日

編集 静岡市教育委員会

発行 静岡市教育委員会

〒420-8602

静岡市葵区追手町 5 番 1 号

印刷 録 東海美術社

静岡市葵区古庄 2 丁目 3 番 21 号

